

拾う

「神様が見てるのにね」

炬あかりが言うので俺おれも目でおう。なぜ無分別に塵芥ごみをすてられるだろう。ひろう人間の事を考えないのか、たんにすてる所までしか思考が働かないのだろう、パンを買う、食べる、すると袋が残る、自分が買ったのはパンであつて、袋ではない、だからすてる。詰つまり、こういう思考だろうか。ばかな。然しかし、ではないとしても、どうしてああ平然とごみをすていく事ができるだろう、炬あかりが袋をひろった。俺おれがうけ取る。クシャクシャと丸めてポケットにつめる。この駅にはごみ箱がない。何所どこかコンビニをみつけてすてる。電車に乗る。空缶あきかんがあるので炬あかりが拾つてもつ。

世界中の塵芥を、ひろって歩く事ができる
だろうか。たとえばの話^{はな}だ。町内中だっ
ていい。俺^おれはむりだと答^こたえる。仮令^{たとえ}自分の
家の四囲^{まわり}だって、すてる人間がいなくならな
ければ俺^おれには拾い^おつづける自信がない、根
気もない、炬^{あかり}は、炬^{あかり}は屹度^{きつと}わからないと答
える。そのくせ、塵芥^{ごみ}がおちていけば、ひろ
うだろう。根気^{あかり}のつづく限り。炬^{あかり}の根気^{あかり}が
いつ尽きるのかは分^{わか}らない。或^{ある}日俺^おれと公園
にはいつて、其日^{その}は映画を視^みようといつて
上映時間までに間^まが有^あったから公園に行った
だけだったのに、吸い殻が散乱しているのを
みた炬^{あかり}はひとつひとつ拾い始めた。最初は
手伝^てっていた俺^おれも、最^もうすぐ、映画はじま
るぞと時計を見て焦^あせりだした。炬^{あかり}はうん
と答^こたえて、でも動く景色がない。緩慢^{ゆっくり}たば
こを掌^{てのひ}らに載^おせる。俺^おれが渡した携帯灰皿
はすでに溢^あれていた。俺^おれはほらと急^いかした
りお前^みが視^みたいいつて言^いつてた映画だぞと促^うし
たりしたが炬^{あかり}は生返事^{なまか}許^ばりで手をとめない。

すると手を休めている俺^おれがわるいのかなという気がしてきた。ひろうのを再開するが烟草^{たばこ}はあちこちに散^ちばっていて嫌気がさす。自分が喫^すつてたものを捨てんなよ、喫煙者へ愚痴をたれる。俺^おれもたばこをすうが俺^おれは絶対にすてたりしない。しかし其^そんなものは社会に関係なく喫煙者は喫煙者で弾劾^{だんがい}される。炬^{あかり}は誰もせめなかった。なにも言わずに烟草^{たばこ}をひろって公園の一角にある灰皿へ捨てた。拾いおえたころ上映がはじまって十分程過ぎていた。俺^おれはあきらめてめしをくう場所でも探すかとたばこに火を点^つけ様^{よう}とした。其^{その}手を炬^{あかり}がとる。俺^おれの腕の時計で時間を確認するとちようどいい時間と笑^わらった。ちようどいいって、ご飯に？念のため確認すると映画にと笑う。そりゃあ予告とかあるけど、俺^おれが急かしても動じなかった癖に、いくつかの文句を言おうとするが早く早くとせかすので笑って仕舞^{しま}った。烟草^{たばこ}をしまつて映画館まで走ってもっと大きい携帯灰皿を買

おうと思った。

俺おれはむかし、塵芥ごみをひろうのが、恥はづかしかった。中学生や、高校生の時だ。偽善者としてみられるのではと思った、あるいは、実際に友人に言われたこともあったかも知れない。丈たけのあわない語ことばを振り回してみたかった丈だけだろう、授業の一環で近所の清掃をやった時、まじめにとり組んだ俺おれを「偽善者だ」と囃はやした友人がいた。明瞭はつきりした記憶でないの、あるいはもつと軽い言葉を記憶のなかで改変してしまった丈だけかもしれないが、俺おれはそれから人前で塵芥ごみをひろうのが恥はづかずかしくなった。ひろう時は人がいない事を確認した。同時に、夫それでもだれかがみていて俺おれの行おこないをほめてくれないかと期待した。そんな期待をするのは恥はづかず可べきことだと自分を戒いましめた。誤茶々ごちゃごちゃと、考えるので、いつも拾いそびれた。いまは善と偽善の区別がわからない。善と偽善はどう遣やって見分ければいいだろう。俺おれを偽善者と囃はやした友人は、何を以もつて

偽善者といっただろう。現代の中学生高校生など、情報にふりまわされ自分の言葉を只大（ただ）事にする事ができないのだから、深く考えるにも当たらないだろうが、気になる。気にしているのか、しかし今はだいぶ薄れた、善と、偽善を、見わけける方法（など）掴ないといまは考える。やるかやらないかだ、目の前にごみがある、ひろうか、拾わないか、其様（そん）なのはすべて自分次第だ、善も偽善もない。判断をするなら、夫（それ）は凡（すべ）て他人に任せてしまつてかまわないだろう。

停（と）まった駅には構内にコンビニがあつて、そこにはごみ箱があつたので捨てた。本当は、是（こ）れだって、いけない事なんだろうね、炬（あかり）が前に言った事を思い出す。人にごみを押しつけてる。自分で処理できないごみを、お店の人に処理して貰（もら）つてる。俺（お）れは言われてから考えた、其（そ）んな事いったら、俺（お）れたちが家で捨ててる塵芥（ごみ）も、いけない事になる、炬（あかり）はさびしく笑ったそうだね、炬（あかり）はこういう

話をするといつも淋しい顔をする、そんな事考えてたら限度ないよ、俺は励ますつもりでいった、限度なんてないところで、いきてるんじゃないかって、気がする、……でも、なにもしてないわたしが、言える事じゃないか、……炬は塵芥をゴミ箱にすてた。

「神様は、なんて思うかな」

仕事の休憩中には、炬の事を考える事が多い、炬はまだ大学生だから、たいていメーイルをすれば返事が返って来る。俺はたばこを吸ってなんて旨いんだろうと思う。おいしいと思える時もある。おいしくないと思う時もある。火を消して携帯灰皿にしまう。携帯灰皿にしては大きいものなので、ポケットに入れると嵩張る。

休憩はひとりです。配送のドライバーなので、何もかもひとりで過せるだろうと思って就職したら、ちがった。午前の仕事は午前におわらせて事務所にもどって来る。いっ

たん休憩してから、午後の荷物を積込んで配送をする。配送先は個人の家だったり会社だったり色々だ。勤めはじめたとき、先輩から昼飯お前も一所に喰うかとお声が掛かったので、鄭重に御断わりした。なんだこいつと思われ、心証をわるくしたかもしれないが、仕事をまじめにし、飲み会などにはいく様にしたらそういうやつなんだと思って呉れた様だ。べつに人と話なすのは嫌いじゃない。ただ、休憩の様に、毎日きまって顔を合わせて話しをしなければいけない時間があると思うと、気が減入る丈だ。

休憩中は本をよむ。本はすきだ、でもたばこの方がもっと好きなので、喫いながら読んだりよむのを廃めて喫ったりする、喫っていると、考えごとができる、大層な事を考える必要はない、只、考える、夫が自然にできるから烟草の事がすきだ。

きょうは、一人、嫌な客がいた。通信販売でなにか買ったらしく、代金引換の荷物をも

って行ったら、「何でお前に金払わなきゃいけないんだ」と怒鳴られた。「ではこちらご購入されていないんですね」と確認を取ると「ちよつとまってる」と言い二十分程またされたあげ句結局金を払った。

こういう客がいると、一日いやな気分がつづく。ほかの客には関係がないと気分を変えようとするが、うまくいかない。もともと愛想が宜い訳ではないので、曇よりした気もちが伝わってはいないかと不安になる。伝わたら問題あんのかと捨鉢な気もちにもなる。もし、もし俺れにも信仰があればこんな気もちはいだかないだろうか、夫れでも、他に、優しくできるだろうか、神さまがいれば。でも俺れには信仰がない、嫌な人間は嫌な人間で、それを引き摺る自分も嫌な人間だ。俺れは人間の儘是を躪えたい、このいやなわるい気もちを、神様とは関係のないひとりの人間として。

然し逆に、あの客に信仰があつたらあの男

はあんなむやみに当り散したりしなかっただらうか。怒鳴れば俺れが憚って荷物をおいていくかもと考えたのか、単に癩癩が溜つていただけかは分らないが、もし信仰があれば、神が今此現場を瞰ているかもしれない、おれの事、悪く思うかもしれない、考えて、莞爾やかに対応してみせたらうか。ばかな。信仰をもっている人間がすべてみな穏やかだとはとうてい思えない。一般の人間よりも、自分の事、或はまわりの事を考える、顧る機会があるだろうから（例えば教典杯を読むことにより）割りあいとしては穏かな人間が増える可能性はあるだろうが、飽まで割合は割合で、暴悪な宗教者だっているのではない、そこが人間の鳩りであるかぎり。宗教が戦争を惹きおこすなどわからない話をしたくない、ただいままで（まだ只た二十年だが）生きて来た実感として、俺れには左様な聖人が群を為すような事態がしんじゃない。群のなかに聖人が一人いるような

事態ならまだしんじられる、しかしもし其^{その}聖人がほかの俗人を薰^{くん}化しようとした場合、俺^おれは夫^{それ}をたんなる自分の価値観の押付け^{おしつ}じゃないかと思つてしまふ、疑つてしまふ、外^{ほか}の人間が俗に墜^おちているから、わたしが彼らを引き揚^あげて上げよう？ 此^こんな傲慢な心持ちではないにしても、もし聖人に俗を見くだす、差^{ちが}違^いと認める気もちがあるとしたなら、俗人にも俗人の論理がある。高きを氣どつて、自己満足しているだけじゃないか、ほしいものをほしいと言わず、腹がたつても慍^いりをかくす、それが人間らしいと言えるのか？ いや、俺^おれは、何をいつてる。俗人に、聖人に、八つ当たりをしているだけじゃないかみつともない。信仰以前の問題だ、あの客にさえ劣るのか俺^おれは、そもそもあの客が劣っているのかどうかさえ俺^おれにはわからない。品性で、道徳で？ 人の、優劣は、なにで極^きまるだろう。きまらないのか？ 優劣などはないのか、それさえ、断然ときめる勇気を俺^おれはもたない。

炬あかりは分わからないと答える。わからないことはわからないと。「知ってるふりしたって、神さまには露ばれちゃうよ」炬あかりには何がみえているんだろう、炬あかりの神様。炬あかりには宗教がないのに神さまがある。神さまをしんじる炬あかりを俺おれはしんじている。俺おれが神さまを信じる事にはならない、「それでいいんじゃない？」炬あかりは全部受うけ容いれる。「できることを、やっていこうよ」俺おれにできることは、あの嫌な客を、わすれることだろうか、うらまななことだろうか、すなおに悪にくむことだろうか、悪にくむことが、わるいことだとは俺おれは思わない。

炬あかりは能よく待まち合あわせに遅刻する。俺おれは時間あかりに正確な方なので、いつも俺おれがまつ。炬あかりは平気な顔でやってくる、「おまたせ」俺おれは皮肉を言う。

「神様は遅刻を免ゆるしてくれるのか」

炬あかりはへへと笑ってこたえない。こいつ

の神さまは都合が**いい**。炬**あかり**はだらしない、
時間にルーズだし、ものをたべる時はよく零**こぼ**
すし、部屋も余りきれいでない。もし炬**あかり**が
実家をでたら、ちゃんと生活していけるのか
と心配になることもある。でも俺**お**れが整頓好
きだから問題ないのかなとも思う。もしいつ
しよに暮らしたら、揉めるんだろうか。夫**それ**は夫**それ**
で折**おり**合**あ**いを付けてやって行けるんだろうか。
俺**お**れはいま一人で暮**くら**しているから、一所**いっしょ**に住
まないかと言おうとしたこともある。然**しか**し炬**あかり**
がまだ学生なので廃**や**めた。卒業して仕事に即**つ**
いてからでも、遅くないだろう。歳**とし**は同じな
のに、生活能力に差があるような気がした。
学生と社会人では意識に差があると、ときど
き同級生に逢**あ**うと思う。

きょうは映画を視**み**に行った。つまらない、
人をあいする映画だった。何**なん**て利己的な愛な
んだろう、何**なん**て抽象的で、他人にむけている
様で、自分にしか向いていない愛なんだろう、
と思った。其**そ**んな批判を心でするといつも思

う。じゃあ本当の愛ってなんだろう、無償の愛のことか、もし俺おれが理想とする愛をたとえば俺おれが絵描えがき切ったとして、この映画をつくった人、この映画に感動した人達は、なんて嘘うそっぽい愛なんだろう、なんて美しくない愛なんだろう、思うんじゃないだろうか。批判なんて意味ない、お互いの価値観を推おしつけあってる丈ただだ、論破ろんぱすれば勝ちの不粹ぶすいなゲームだ、隣あかりで炬かりは感動してないていた。スンスン鼻を吸する音がする。俺おれと炬あかりは趣味があわない。映画にいく時は交互に候補をだして行く。たいてい俺おれが面白い時は炬あかりが退屈な顔をし、俺おれが詰つまらない時は炬あかりが顔を輝かせている。だったらちがう映画を見ればいいのに。なんでだろう、だから、炬あかりも俺おれもおもしろいと思える映画に逢あえる、と、すごくうれしい。

きようのは詰つまらなかった。炬あかりが遅刻して来たこともあって、俺おれはムスツとしていた。最初炬あかりはあのシーンが宜よかったねえと話し

懸^かけて来たが、俺^おれの表情をみると口を噤^{つぶ}んだ。俺^おれはこういう時なにも喋^{しゃべ}舌^べらない。もともと、おしゃべりでないし、話さなくてもかまわないと思^{おも}っていた。つたえるべきことをきちんとつたえられたら、夫^{それ}で充分^{ぶんぶん}だろう。電車がゆれる。座席^おはあいていたが俺^おれと炬^{あかり}は立^たっていた。炬^{あかり}は極力^{きょくりき}席^{せき}に座^すわらなかつた。「私は、座^まらなくても大丈夫^{だいじふ}だけど、必要^{ひつやう}としてる人がいるでしょ、夫^{それ}はべつに年齢^{ねんれい}のこと丈^{だけ}じゃないと思う。お年^{とし}寄りや妊婦^{にんぷ}さんみたいに、あたり前に譲^やって上げましようってなってる人丈^{だけ}じゃなくって、若いサラリーマンの人でも、仕事で足を棒^{ぼう}にして歩き回^{まわ}っててへトへトかもしれない。私^{わたし}にわかるのは、私はすわらなくても大丈夫^{だいじふ}ってこと丈^{だけ}だから、私が席^{せき}をふさぐことはしたくないんだ、こんなふうに、いちいち自分に言い訳^{いげ}しなきゃ席^{せき}をゆずれないってだけなんだけどね」炬^{あかり}がすこし笑^{わら}って言ったことを思^{おも}い出した。俺^おれは最初^{さいしょ}、なんとなく、そういうのを自分^{おのれ}に

課してるんだろうと思つてふうんといつていたが、又別の日に炬あかりの頑かたくなさを見て驚おどろいた。炬あかりは熱を押して俺おれと遊びにきていた。たしか付き合つて一年の記念日だったと思う。逢あつた始めは体調がわるいのにな気がつかなくて、でもご飯を喰たべてる時に分わかつた。炬あかり、顔色悪いぞ、言つた俺おれに無理して笑つた、そうかな、ちよつと疲れてるのかもね、ご飯もろくにたべないので額に手の中あてた。熱いぞ、俺おれはあわてて精算して帰りの電車に乗つた。炬あかりは何度か「ごめんね」といった。さいわい電車はそこまで混んでいなくて席が空いていた。ほら、座ろう。促うながした俺おれに炬あかりはなぜか抵抗した。俺おれに獅し噛がみついてはなれない。炬あかりが言つたことを思い出した、こんな時ぐらい座つたつて宜いいんだよ、今、席を必要としてるのはお前だろう。炬あかりは激しく首を振つた。代かわりに足もとを指ゆびさす、ごみが、おちてる……俺おれの靴には空き缶がころがってきていた。俺おれは苛いら烈いらした。お前は

何になりたいんだ、其んなことしたって、熱がさがる訳じゃない、自分の身體があぶない時にまで他のこと考えることはないんだよ。

炬は上気した、苦しそうに潤んだ瞳で俺れをみた。私は、

「私は言い訳ばかりだけど、神様にだけは、言い訳したくない、……」

炬と俺れの降りる駅は次の駅だったから俺れは炬を抱き締めて待った。降りる間際に缶をひろって握り締めた。スチールの缶は硬くて変形もなかった。炬をご両親に引き渡したときも炬は「ごめんね」と言った。俺れは公園で缶をなげ棄てようとしたができなかった。コンビニのごみ箱に力任せにつっ込んだ。俺れは、炬の、なにに怒ってるんだろう、……いま不機嫌になっている理由がわからなくなった。気分をかえて詫まろうと思った。その時炬が「ごめんね」と言ったので俺れもごめんといった。仲なおりをして、ふたりで夜をすごした。

結婚のことを考えたのはいつ位ぐらいからだっ
ただろう。少すくなくとも昔、中学生や高校生の
ころは三十をすぎてからかな、と漠然と考え
ていた。当時は女の子とつきあったことさえ
なかったのに皮算用だけは立派だったから
可笑おかしい。高校を卒業していまの配送の仕事
に就職して、家を出てから考えが変かわった。少
し宛すつだが。

炬あかりとつき合いはじめたのも原因としては
大きいかもしれない。炬あかりとは高校が一所いっしょで、
高校三年のときにはクラスも同じになった。
が話したことは殆ほとんどなかった。ない儘まま卒業
した。夫それから半年後に同窓会と称して飲み
会をやったときにまた炬あかりにあった。奇麗きれに
なったな、というのが正直な印象だった。

其所そこで連絡先を交換して連絡する様になっ
て、つき合ってからもう二年以上がたつ。ひ
とり暮ぐらしはあとすこしで三年をかぞえる訳
で、俺おれはこいつと結婚するんだろうな、と

思う様になった。喧嘩もしていやな気持ちになることも有るが、大抵そこまで長引ずながびかに仲直りをするし、詫あやまるのもどちらからともなくという感じだから、バランスがいいのだと思う。炬あかりには鍵もわたしてあるからしよっちゆうくる。とは言つても、大学三年生の炬あかりはすこし前から就職活動をはじめているので、以前程ではなくなったが。

だから、こういう時こそ、いっしょに住んだら便利だろうなあと思う。

きょうは炬あかりがくる日だ。序ついででなので、掃除でもするかと思立つ。俺おれは細心まめな方だとは思うが掃除機はここ一カ月ぐらいかけてなかった。こういう時、炬あかりのだらしなさを指摘して置いて、自分はどうかと思う。ほかの人は何どうしているのだろう。俺おれの友人は半年は優ゆうに掃除機をかけないやつもいる。掃除機も持っていないやつがいる。すると、俺おれが細心まめなのでなく、俺おれの四囲まわりが図法螺ずばらなのかもしれない。

炬^{あかり}がきた。何だか、元気がないので、どうかしたかと訊^きくがなんでもないと答える。掃除が途中なので、ちよつと座^くつて呉^くれと言^いつてコーヒーを淹^いれる。うちには椅子がないので、低い食卓のまゑで床に座^まつてもらう。掃除はあと台所をのこす許^{ばか}りだ。此家^{この}は古く駅からも遠いので安くて広い。俺^おれは仕事柄^{がら}車で移動することが多いので駅から遠いのは問題がないにしても、広いと掃除が面倒だといえは面倒だ、べつの一人暮らしをしている奴にはぜいたくだといわれるが。

「話^{はな}しがあるの」掃除を終え掛^かけた俺^おれに炬^{あかり}が言う。俺^おれは手をとめ食卓に向^{むか}う。其^{その}前に自分のぶんのコーヒーを入れた。炬^{あかり}は手を付けていない。炬^{あかり}はカラリと鍵をおいた。「別れて欲しい」消え入りそうな声で言う。

心臓の音が聞^{きこ}えた。いわれた意味が理解^{りかい}出来ない。「どういうこと」言うが炬^{あかり}はこたえない。俯^{うつむ}向^むいて下の、食卓より更に下の自分

の手のあたりを見ている。正座している。き
ようはジーンパンを穿はいていて、コートも脇に
置いていて、そとが寒いからだろうと思っ
いた。俺おれはまったまったがまち切れなくな
った。何どういうことだよ黙もってんな言いって
途中で炬あかりが遮さえぎった。

「好きな人ができたの」

俺おれは又また黙もった。黙もって息がくるしくなっ
た。黙もれば黙もる程い瞋いりが堆積たいせきしていく様ようだっ
たが、発はすべき言葉ことばが分わからなかつた。一方で、
何をいっても瞋いりは出いては行かないだろうと
言いう事を考かんえる自分もいた。単純にいえば俺お
れは戸惑あかりった。炬あかりは震ふるえていた。肩をふる
わして音もなく泣ないていた。音が無いのだけ
俺おれにとどいていない丈だけかを俺おれはあやしん
だ。なぜお前まえがないいていると思おもった。瞋いりは
またたやすく湧わいた。瞋いりが生うまれてしかしど
こにもだせずため込んでいるうちに少しの時
間がたった。

「どんな、どんなやつだ」俺おれがきいた。瞋いか

りが頭にも渦まいて、どうしたらいいのか、判断が出来なかった。時間を稼いだかった、言いたい事を整理する時間を、然し夫は何分あるいは何時間あればたりるのだろう、寧そ怒鳴りつけてやればすむだろうか、なにもかも解決するだろうか、俺は何を考えているのだろうと思った。解決したいのか、瞋りをすこしでも減すべきなのか、炬の不義を責めべきなのかと考えた。炬の不義。この言葉が通りすぎると俺の瞋りはより燬えた。俺を燦いてくるしめた。炬の頬を張って、いや、殴り付けて、蹴り飛ばしてやれば、何うにか、何にかなるだろうか。どうにもならずにすむだろうか、腹を殴って、顔を蹴って、やれば、どうなるだろうか、どうにもならないだろうか、炬が喋舌った。

「あかるくて、面白くて、やさしい人」

俺はテーブルを殴ってたった。炬がびっくりとしたのがみえた様な気がしたが、夫は俺れの虚栄心の為めかもしれない。俺れは自

分の家をでた。誰とも会う気になれず、家から距離のある駐車場で車にのり、発車もさせずにて中から車体を蹴った。拳が痛むので矢張りどうにもならなかった事を知り、瞋りは拳をとり巻いて不純なものに変わっていくのを知った。不純な瞋りは更に不快で、夫は胸の中の瞋りと融合して又瞋りになった。

何所かへドライブして旨まくもないめしを喰って帰って来たのは深夜だった。家には鍵が掛っていた。中にはいると、郵便受もないドアポストの下に、裸の儘のキーホルダーもなにも着いてない鍵がころがっていた。ごめんなさい位書けよとドアをなぐった俺は、謝罪の手紙を心のなかで期待していた。

夜が来る、ねむれない夜、瞋りで、憎みで、膝を突き、肘をつき、枕と鼻を突き合わせる。枕を覆った布、青色の、炬がえらんだもの、炬！ 剥ぎ取って、タオルを宛てたのは、何日前だ？ 忘れてないわすれたふりをして

いる三日前だ、あの、別れを、つげられた日だ忘れもしない！ すきな人、すきな人、すきな人、自分の行ないを、神様がみてるんじゃない、なかったのか、好きな人作っちゃいけないってのか！ すきな人できた場合、どうするのが最善の選択か、あの女が仕た、アクション起すまえに別れんのが最善じゃねえのかだけど！ 其んな素振りいっさいみせてなかった、俺れが気付かなかった丈か、そう言やここん所うちにはあまり来てなかったあれは就活のためだろう、まさか、まさか、まさか、確かめたい、あうのか、あいたいのかあのか、そみてえな女と、違う確認したいだけだ、はっ、くそみてえな女ずいぶんな言草だな前傾り込んでた癖に、信頼、してた癖に、あんな女、みた事なかった、神さまとかいって、なにもかものり蹴えようとして、夫で俺れも裏切ったのか！ 裏切っただなんて大げさにいう、被害者気どりか左様だよ被害者じゃねえか被害者じゃないのか？ ああ、吐き気がす

る、でも実際には吐けない俺れの傷なんて左様なもんなのか吐けりゃあそれが大層な傷かよ！

俺れは携帯を開いた。この三日間で何十回と、メールがとどいていないか確認した、何十回確認しようとメールは来ていなかったそうかよ！ 詫まるようなことは、なにもないってか詫まるメールが来たら、俺れはどうするんだろう……罵倒することを夢に見た、相手からの文面をいく通りも妄想して、それら凡てに罵倒と、考えられる限りの憎しみを載せて返した免したいのだろうか、免して、また、二人で遣り直したいのだろうか、現実にはメールも電話もきていない。

仕事をする、荷物をつみこむ、運ぶ、卸す、運ぶ、卸す、事務所へかえる、飯をくう、寝れる日はすこし寝る、荷物を積込む、運ぶ卸して運ぶ、仕事をしていると楽だな、思い、同時に平常どおり仕事ができるのが忌ま忌ま

しくなり、朝起きるのもめんどろだが仕事なので起きる、そして、携帯を、確認する。

此方から、メールを送ろうかと、何度も思った、電話をしても、出て貰えなければ、仕様ががない。夫に感情的になつてしまうのではと思つて、こわい、なぜ感情的になつてはいけないのか、会話にならないから？ 感情の話しだ、感情と、実生活の話なのに、感情的になつちゃ不可ないなんて、左んなものか。だから、メールを送ろうかと思つたが、送る可き語なんてあるのか。

何うして俺れではだめだったのか、俺れの、どこが、駄目だったのか、教えて呉れてもいいだろうと思つた、女々しいな、女々しくて浅間しい、何所かが、駄目だから、去つて行つたのだろう、そんなの明瞭言葉に出来る訳ない。あるいは、どこもだめじゃない、ただ、あの人がよくつたなどと躲避かされる、只の責任のがれで！ 又、怒りが、もえて来る、仕事が終わると考え、勝手に相手の発言を拵ら

えて、ひとりで瞋^{いか}りを滾^{たぎ}らせる、ぶつとぼしてやりたい、つきあってる時は、一度も、手を上げたことなんてなかった、大切にしてた、大切にしてたんだ！

だからって相手が自分を大切と思う訳じゃない。

そとでたばこをすっていた丈^{だけ}で、気づいたら三十分経っていた。二本しか喫^すっていないのに、気が付けば手が寒い、帰ろうと一度事務所に戻ると事務の宇川^{うかわ}さんから「今日飲みいけない」と誘われたので一も二もなく賛成した。

宇川さんは職場の数少ない女性で、若い女性^{だけ}は宇川さん丈^{だけ}だ、とは言っても二十八だから俺^おれよりも七つ歳上^{としうえ}ということになる、歳の話^{はな}しをすると怒^おこられるが。宇川さんとは会社の飲み会で席が近くなった時気が合ったので時々、数か月に一回程度だが、のむ様になつた。

炬^{あかり}は宇川さんの事をしつていて一所^{いっしょ}にの

んだこともある、炬^{あかり}か、考えるくせが抜けない、携帯の番号も知らないから浮気だと思わないでね、と宇川さんは炬^{あかり}に笑^わらつていた、「炬^{あかり}ちゃんとはどう」酒がくる前に唐突^{いきなり}話をふられる。

「別れました」

「えっ別れたの」

「はい」

「何でまた」

「好きな男ができたとかで」

「じゃあ失^ふ恋^られたのか」

「そんな露骨にいわないでください」

「いつよ」

「一週間……も前じゃないです」

「ああ……そうだったの」

宇川さんは煙草^{たばこ}をすって煙^{けむ}りを吐いた。俺^おれも煙草^{たばこ}に火を点^つける。炬^{あかり}に関する事を、口からだしたくもなかったが、一人で鬱々と餐^めを喰^たべるよりはずっとましだった。食欲は別におちていなかった、其^{その}事でまた忿^む付^{かつ}いた。

しかし、落ちたら落ちたで、きつとむかついただろう。

「何、一回で話しついたの」

「ん、まあ……左^そうですねうちの家で」

「どこの男で、どんな経緯で、いつ頃からそうなったって？」

「なんか、明るくて、おもしろい男だそうです」

「いやいやどんな男かはしらんよ」

「あと優しいとかもぬかしてました」

「まあ最初はたいていどこの男もやさしいよねえ……んーいや、そうじゃなくて、なに、

問い質^{ただ}してないの？」

「まあ、……そうですね」

「炬^{あかり}ちゃんから切りだしたの、あんたが問いつめたの」

「炬^{あかり}から、別れてほしいって言われまして」

「そんではいいいいって別れて来た訳？」

「はいはい言ったわけじゃないじゃないですか、

ただ……まあ、なんかいったつけな」

「何も言^{なん}ってないと」

「うん？　まあ……左^そうですね」

「そうですか……」

宇川さんは又^{また}けむりを吹いた。俺^おれはたばこを揉み消す。料理がきたのでたべた。甘^{うま}いと思った。宇川さんは烟^{たばこ}草を喫^すい、飲^のむ。暫^{しば}らくだまって喰^たべた。話を転じた方がいいかな、気まずいかな、思っていたらまた宇川さんがしゃべった。

「お節介^{むか}かも知らないけどさ、あんた、忿^{むか}についてないの？　その儘^{まま}でいいのとつぜん来て話^かして帰^かえっちゃった訳^{わけ}でしょ」「あつ家をでていったのは俺^おれです」「あつそうなの。でもさあ、突然そんな一方的に別れ話されて、むかつくでしょ、くやしいでしょ、あたしだったら、男^ひ引^ひつ叩^{たた}くだろうし、実際したことがあるし、そうでないにしても、自分の思う通りにやってみた方がスッキリするんじゃない、夫^それとおおわってみれば其^そんなにす

きでもなかったの」

俺おれは口くちにしていた料理を嘸のみ下くだしながら考えた、好きでなかった訳はない、好きだった、初めて好きになった女だった、今でも、好きなのかと言われれば、好き、なんだと、思う、だからゆるせない。憎にくくしみがとまらない。俺おれは啣くわえていた箸を置いた。

「其その、話しを、された時血がへんな風に廻めぐるったっていうか、ふざけんな、ふざけんなって何度も思っおもって、なんか、言いって遣やろうと思おもったんですけど、なんか、いっいって、ほんとに傷が残やるのかなと思おもったんです。汚きたない話ですけど、なんか俺おれは其その話された一瞬に、こいつにダメージをのこしてやりたいと思おもって、どうしたら宜いいだろうとか考かんえて、凄すごい、瞋いかりばかり湧わいて、何どうしたら宜いいのか全然分かんなくて、でも、此こ所こでなにかゴチャゴチャ言うより、なんにもいわずに去さった方が損傷ダメージがのこるんじゃないかと思おもって、でも只ただ去されなかったから机だけわざと大きい音出

るように叩いて（多分わざとです）家を、出て来ました。でも、俺（お）れがそうした方がダメージが残ると思ったのは、良識のある人間、俺（お）れが、しってる、炬（あかり）であって、あの日の炬（あかり）が知らない人間、だとは、いわないんですが、もしかしたら炬（あかり）は全然俺（お）れがしんじてた、通りの人間じゃなくて全部幻想だったかもしれない、俺（お）れは炬（あかり）のとなりにいたはずなのにずっと見てた筈（はず）なのに、とか、ぐるぐる考えて、やっぱりなんか言（い）ってやれば宜（よ）かった、いまからでも、いつて遣（や）ろうかなんて、でも、俺（お）れがしんじてた、炬（あかり）まで疑（うた）がいたくなくて、夫（それ）は自分のため自分でも夫（そ）れはわかってるんですけど、それは、やっぱり、悔（ほ）しいです。でも、他（ほか）の理由ならともかく、好きな男が出来たって理由だったら、もうとり戻せないだろうし、もしとり戻せても、それは今までの関係と同じじゃなくって、俺（お）れはいままで通り炬（あかり）のこと信（ま）じることは出来ないし、疑（うた）がった儘（まま）じゃないですか、炬（あかり）が

だれかに優しくしても、俺おれになにか言ってくれても、絶対疑いはとれない。だから、引き止めなかったし、なにも訊かなかったんです、まあ全部その瞬間に考えた訳ではないですけど」

あ、なんか、ごめんなさいと言うと宇川さんは「ううん」といった。又またたばこを喫すって店員に灰皿を替えてもらう。此この人は、同情も、気休めもいわない。だから、自分が同情や気休めを期待してたんだという事に気づける。宇川さんは「そっか……」といった。

「まあ、あたしの友達で、好きな人できてって言ったときの相手の反応で、自分への本気度を確認する子もいるけどねー」

「……夫それで、相手がなにもいわずに去ったらどうするんですか」

「相手にもよるみたいだけど、ごめん遣やり直そうって自分からいい出すみたいだねー結局自分の本気度を確認してんじやんって皆みんななで笑ったけど」

宇川さんが笑うので俺れも笑った。

「まあ、そういう遣方やりかたをする人にはこつちからお断わり願いますよね」

宇川さんは笑って烟草たばこをもみ消した。

「正直に言って呉れて、有難ねありがた。まあ、夫れでも蟠まりわたかがあるなら、逢あってみるのも好いと思うよ。自棄飲やけのみだったら御姉おねえさんがつきあつて上げるから、いつでも誘いなさい」

自分が、不幸だと、思っていた。それよりも不幸な人はいくらでもいるとわかつてはいたが、夫れは知識の上だけで、感覚としてしんじることはできなかった。店内が賑にぎわう。このなかの何人が幸せで、何人が空笑からわらいで、何人が泣いているんだろうと思った。

かえると、話はなしが出来て、よかったなと思えた。整理ができた。憎しみは憎しみの儘ままで、薄らいだ気もしないが、気分は変かわった。とに角かくめしをひとりでくいたくなかったから行っただけだったが、いって好よかった。宇川さんの

お蔭^{かげ}だろう、いつもよりは、晴^{はれ}やかな気もちで、布団の中に潜^{もぐ}った。

眠る前に、炬^{あかり}の友達の深山^{みやま}さんという子と三人で呑^のんだときのことを思い出した。炬^{あかり}を送ってから、暫^{しばら}く、深山^{みやま}さんとふたりでかえっていた。「あの子のこと、大切にして上げてね」深山^{みやま}さんは道中ふいに言った。

「ああ、うん、……夫^{それ}は、もちろん」

「あの子、平常^{ふつう}じゃ、ないでしょ。変^{かわ}ってるっていえばそれまでだけど、それ以上だよね。宜^いい子^こなんだけどき、……凄^すごくい子^こなんだけど」

「ああ……うん」俺^おれはわずかに頷^{うな}ずいた。

「なにかに縛^{しば}られてるって言うかさ、あれじゃ、幸せになれないと思うんだよね、心の底からはさ、だから、たいせつにして上げて欲しいの」

深山^{みやま}さんが語ったことは、俺^おれにははじめての話し^{はな}だった。ふたりが出逢^{であ}ったアルバイトで、炬^{あかり}がそこを退^やめる切掛^{きっか}けになった話

しだった。炬あかりと深山みやまさんは、ある御菓子屋おかしやでアルバイトをしていて、年が一緒だったこともあり仲よくなった。当時二人は高校生だった、そこは高校生だけでなく、主婦の人や大学生など幅広い年齢の人が働はたらく職場だった。炬あかりは、まあ、うまくやっていた様にみえたという。或日あるパートのおばちゃん騒さわぎ出した。

「わたしの財布がみつからない！」

更衣室のかばんのなかに置いていた所、失なくなったと言う。開店前に朝礼をしている時で、店長が撫なだめた。ほんとうに、ちゃんと鞆かばん探してみた？ 信じてもらえないおばちゃんあかは激昂あかした。貴方あんたでしょ！ 炬あかりを指ゆびさす。貴方あんた、着がえるの、いつもおそいじゃない、私のあとに更衣室はいったのあんた位ぐらいよ！

炬あかりは驚おどろいて目を丸くした。そのおばちゃんあかは、なにかと言うと騒さわぎだし、すぐ四圍まわりの不当さを主張するので、疎ましく思う人も

おおかったという。深山^{みやま}さんはまた始まったと傍観^{あかり}していた。炬^{あかり}が否定して、店長が仲裁^{そもそ}して、おわりだろう。抑^{そもそ}も本当に財布がなくなっているのか、鞆^{かばん}の奥からでて来るんじゃないのか、思っていた。

然^{しか}し炬^{あかり}は否定しなかった。否定も肯定もせず、睨^{じつ}と目を俯^ふせていた。店長が優しく声を掛けた。違^{ちが}ってたら違^{ちが}うっていった方がいいよ。しかし炬^{あかり}は動かなかった。おばちゃん^{あかり}は図^ずにのった。やっぱり！病^{やま}しいことがあるからだまってるんでしよう、一寸^{ちよつと}、この子^このかばん調^{てう}べてよ！

深山^{みやま}さんが抗弁^{あかり}して、炬^{あかり}に遣^やってないって判^{はつきり}然^{しか}言^いってやんなよ、声をかけても炬^{あかり}は黙^{もく}っていた。まさか、深山^{みやま}さんは思った、店長もあせりでした。おばちゃん^{あかり}はますます騒^{さわ}ぎ、ほら、はやく調べなさいよ、警察呼^よんでも宜^いいのよ、店長も警察沙汰^{さた}は嫌^{きら}でしょう、開店^{かい}の時間が迫^{せま}っていた。

結局^{けつ}ほかの人^{ひと}には仕事^{しごと}にかかって貰^{もら}い、店

長と、社員が一人、炬とおばちゃんで更衣室に向い、閱することになった。深山さんは私も入れて呉れと主張したが、店を開けない訳にはいかないと押留められたという。まさか、炬が、其んな筈はない、まだ一年とすこしのつき合いだが、そんなことをしない子だってことぐらいわかる、ほんとうに分ってる？ いや、信じてあげなきや、でも、だったら、否定すれば宜いだけの話でしょう、否定しないってことは、まさか、

「人を信じるって、口にするのは簡単だけど、じっさいああいう場面に逢った時、信じつづけるのはすごく難かしいなって、その時思った」

深山さんが言うので、俺は頷いた。

結局炬の鞆からはなにもでて来なかった。念のためとおばちゃんのかばんも検められたが、睨に財布は見つからなかったという。おばちゃんはすみずみまで執拗に調べたあと、現金だけ抽きとって、窓から捨てた

んじゃないの、猶も喰い下がったが炬の財布にはたいした金はいっていなく、店長が其後更衣室周辺を漁ってみても財布は出て来なかったの、おばちゃんの財布は何ものかに盗られたということしかわからなかった。おばちゃんは不服だったが、警察だけはと店長に懇願され、それ切り何等の発展もなかった。

だからおばちゃんの疑がいは晴れない儘、他のパート連と結託して炬を窘りに懸り、ほどなく炬は其所を退めた。後日、「違うなら違うって言やいんだよ」と店長が憤おったのを、深山さんはきいてなにも言えなかった。

「退める時、あたしには声を懸けてくれたのね、わたし、やめるのってさびしそうな顔して言ってた。貴方が間違っていないなら、やめることないじゃない、ねえ、どうして一言私じゃないって、いわなかったの、炬はやってないんでしょって私なんか悔しくて、

怒っちゃった。そしたら、炬あかり言ってた」

私が信じて貰もらえないのは、それまで私がしてきたことの積み重ねだから、しょうがないよ。努力がたりなかったんだと思う。夫それに、私がやってないこと、絶対に疑うたがわらないで知っていてくれる人がいる。あそこで私じやないっていつても、ほかのだれかが疑うたわれて、そしたら一所いっしょでしょ。だったら私でいいかなって思ったの。

「私よ能く分わかんなかった。だって、一步まちがえば警察沙汰えんざいになって、冤罪えんざいでも何でも捕まっちゃう可能性もある訳でしょ、あんな口うるさいおばさんにも責められて、夫それに、自分の疑うたがいを晴はらすことでほんとに拘とったやつがつかまるかもしれないじゃない、言っただけどそうだね、私、まちがったことしてる淋しそうに笑って、なにもいわないの。私怒ってその場をとび出しちゃったけど、今でも、炬あかりと会ってる。今でも炬あかりのこと正しいなんて思えないけど、……」

俺^おれも正しいとは思えない、でも、炬^{あかり}が
言った「知^しつていて呉^くれる人」っていうのは、
吃^{きつと}度神様のことなんだろう、思^{おも}った。炬^{あかり}は、
以前ひどく誤解を受け、擲^{から}揄^かわれたことがあ
るので、それから神さま云々^{うんぬん}は極力人に言わ
ないのだという。俺^おれは此^{この}とき其^{その}話^わしを聞い
た許^{ばか}りで、本当に神様がいると思^{おも}っているの
だろうかと、疑^{うた}がつていた。でも疑^{うた}がい度^たく
はなくて、この話をきいたとき、鳴^あ、ほと
なのかなと思^{おも}って安心した様な信じ切れない
様な複雑な気分にな^なったことをおぼえてい
る。

思^{おも}いだしたら少し笑えた。あいつはあいつ
なりに神様にそむかないように、誠実に俺^おれ
と別れたんじゃないか、思^{おも}って、左^さ右^うしたら、
メールが来て夫^{それ}は真摯^{あや}に詫^わまるような文面
で、俺^おれが寛大に許^{ゆる}すような妄想をしたから
で、俺^おれはばかだなど笑^{わら}った。ほんとうに左^さ様
なメールが来たら、何^どうするんだろう、……俺^お
れの妄想は蠹^ば蝦^かみたいで、だから、鳴^ならない儘^{まま}

の携帯電話を意識しながら、俺おれは眠った。

炬あかりがいったことを思い出した。別に、そんなに躍起ごになつて、塵芥ちみ拾うことないんじゃない、俺おれが訊きいた時だった。

「やつきになつてゐる様に、みえるかな」

「や、夫それは、……言葉の文彩あやつて言うか、……躍起、ではないけど、ちゃんとひろつて偉いなあつて思つたつていうか……」

炬あかりは笑つた。「其そんなにフオローしなくて好いいよ。たしかに、……むきになつてゐるのかもね……」炬あかりは暫しばらく考え込んだ、「ねえ、こんなこといつても、信じてくれないかもしれないけど……」炬あかりは俺おれを見た。「神さまつて信じる？」

「神様か……考えたこともないな。つてことは信じたことはないんだろうな。実家うちはべつに宗教にはいつてゐるわけでもないし、神様の恩恵を蒙こうむつたおぼえもないしな……何、炬あかりんちはなんか宗教に入つてゐるの」

炬^{あかり}はさびしそうに笑った。「宗教か、……
うちは全^{まっ}たくの無宗教だよ、お父さんも、お
母さんも、平^{ふつう}常の人。でもねえ、わたしは神
さまのことしんじてるんだ、……私や、世界
のこと、上からじつとみてるの」

春のおわりか、夏の始めか、気^{きもち}持の好^{いい}い日
だった。俺^おれたちは海のみえる公園で、ベン
チにすわっていた。俺^おれは神様について考え
たことがなかったから、返^{かえ}事をし兼^{かね}た。「見
られてるんじゃあ、へたなことは出来ないな」
鳥が飛んで鳴いていた。

「そうだよね、下手なことはできない、だ
から、私は、ごみをひろうの。ごみを見^み逃^{のが}し
たり、言い訳をしたり、全部神さまにみられ
てるから、胡^ご魔^ま化^かしたくないんだ。緊張して
るのかも知れない、……夫^{それ}でも、できること
を、やれたらなつて」

「そうか……」俺^おれは、何^どんなことを、考
えていただろう、どんな気もちで、炬^{あかり}に接
していただろう、いまは曖昧にしか思い出せ

ない。「天国にいききたいとかでは、ないんだ」

「私の神様はね、私がかつてに造^{つく}っちゃったから、ばつを与えたりとかはないんだ。ほめてくれたりもしない、ただ覽^みてるの。天国も地獄もないし、前世も来世もなくって、なにもしないんだ。具體^{ぐたい}的に考えたことないから人間のかたちもしてなくって雲みたいなの目とか鼻が付いてる程度」炬^{あかり}は笑った「ねえ、此^こんな話^{はな}しを、中学のときに仲の宜^いい子にしたらね、笑われて言い触^はらされちゃった。お前新興宗教に這^{はい}入^いってんだろって、男子には指^{ゆびさ}されるし、だから、あんまりばかにしないでね」

「仕^しないよ」俺^おれは左^そうだたばこをすっていた。「炬^{あかり}のこと好きだからね」

炬^{あかり}は晴^あれやかに笑^わらった。俺^おれは炬^{あかり}の笑顔が好きだった、淋^さしく笑^わうのは嫌^{きら}いだった、其^そんな顔^かすんなよ。俺^おれが、傍^そばにいて、神様のことごまかさないうで済^やむ様に、手^て伝^でって遣^やるから。そうだ、そばにいること、ねがっ

てた、……

黒池くろいけと逢あうのは、数カ月ぶりだった。黒池は中学のときのともだちで、今も時々飲みに行く。黒池は大学生だった。黒池は就職活動のことを嘆たんじた。

「就活まじで面倒臭めんどくせえ。でも、ここで頑張ねえと将来不安だしさあ、ああ学生生活もあと一年かあー」

「お前ねえ、もう三年もまえに学生生活おわってる奴の前で、そんな贅沢言うんじゃないよ」

黒池は突つつ伏ふしていた顔をあげた。「でもお前すげえよなあ、高校卒業してすぐ就職だろ、己おれすぐやめると思ってたもん正直。大学か、専門学校いきやあよかったのに」

「別に」俺おれはひと口酒をのんだ、「働く方が楽だよ。仕事にも困よるけど、学校忙いそがしくてバイトしてるやつより時間有るし、金も自由に遣つかえるし、嫌なこともあるけどそんな

ん何様なことでもいっしょじゃん、ちゃんと働らけばそのぶん自分に返って来るから俺れは気に入ってる」

卒業に際して進路を選べと迫まれた時、俺れは就職を選んだ。うちの学校にはほとんど就職を希望する生徒はいなかったので、先生には何度も確認を取られた。本当に就職で宜いのか、大学だってがんばれば行けるし、いまは専門学校も有るんだぞ。俺れは只嫌なだけだった。当り前に大学行って、それが無理なやつは専門行って、時間かせぎをしている様にしかみえなかった。目標を持っているなら宜い。でも、やりたいことを捜すとかぬかしている奴、目標をもった佯をしているやつしかいない様に見えた、拗けた俺れの目には。俺れは高校のころからバイトをしていて、そのバイト場では年上の人許りだった。其人達の話しを聞いていると、あれに興味があつて専門いったんだけどさあ、卒業して就職したら合わなかったから退めちやったよ、やり

たいこと探そうつつって勉強^{すげ}凄え頑張って大
学行ったんだけど、結局見つかなかったよ、
だったら、遣^やりたいことより自分に何ができ
るのかを知るために就職しようと思った。

駅前にある安い居酒屋であるここは、いつ
も賑わっていて寧^{むし}ろ阜^{うるさ}蠅い。大学生が多いの
だろう、余り騒ぐので会話が聞^{きこ}えないことさ
えある。「そーいやお前さあ」黒池が探る様
な目で酒を飲む。「炬^{あかり}ちゃんとは最近どうな
の」

俺^おれは平静をたもつ^たために烟草^{たばこ}を喫^すった。

「別れたよ」自分で思ったよりずっと、波風
はたたなかった。

「あつ別れたの」黒池は拍子ぬけした様で
驚く。「なあんだ、じゃあ取越^{とりこし}苦労だったな」

「なにが」

「いやあ此^{この}前さあ、一カ月位^{ぐらい}前かな、炬^{あかり}
ちゃんが男と電車乗ってるの見てさあ、夫^{それ}が
又^{また}すげえ親しそうな雰囲気だったからこれ
危険^{やば}いんじゃないかなあと思ってお前にいお

うかまよってたんだよね。でも其^そんな敢^あえて報告すんのもあれじゃない？ 女々しいって言うか、そんなの当人同士で解決すりやあい問題だし、浮気か何^どうかは瞭^{はつきり}然^わかは分^{わか}んなかった訳だからさ、放^{はな}つといた訳よ。でもこの前、一週間ぐらい前にも同じ男と——しかも可^{かなり}也^{なり}の男前よ——電車のつて席座^{せき}つていちやいちやしてる？ とまでは行かないかもだけど手えつないで密着しながらお喋^{しやべ}りしてたから是^{これ}は不^ふ可^かんでしよう、と思って急遽お前に連絡とった訳なんだよね。いやあ同じ車両だしおれ露^ば見^れんじゃねえかと思って冷^{ひや}々^{ひや}してたんだけど、人も結構いたし夫^それ以上にあれは夢中だったね、目がハートだったよ、そっかー別れてたのかーご愁傷様ご愁傷様、己^おれ最近大学で彼女できてさあ、よかったら彼女の友達紹介してやるよ忘れろって忘れろって、日はまた升^{のぼ}るよ雨もいつかやんでー」

黒池はよほど安心したのか喋^{べらべら}々と言葉を吐いた。俺^おれは周囲の噪^{そうおん}音が遠くなったように

感じたが、黒池の聲が耳に分け入ってくるので相槌を打ち、ときには話しをうながした。俺れが別れたのは二週間前だ。いや、それより、電車で席に座って？ あ、の、炬が、熱を出しても頑固に立ちつづけた炬があ、の女が、席にすわったのしそうにおしゃべり？ 黒池が冗談を言つて笑うので俺れも笑つた。

金を払つて店をでた。黒池は肩の荷でも卸したつもりか上機嫌でかえつていった。黒池は、悪くない。思つても思つても憎くしみがわいた。俺れはたばこの箱を握りつぶして踏み躪ろうと思つたが、其んなこととして、何になると憎しみを足の裏にかくした。

嘘だったのか、ぜんぶ、神さまのことなんて信じてなかったのか、あんなに、頑固に、座席にすわらなかつたのはただの陽姿？ 思い出しても、左右は思えなかつた、ほんとうに苦しうだった、だから俺れも苦しかったんだ！ 仕事をしながらでも、考えた、でも

わからなくて答^{こたえ}は出なくて、うそだったと、それ丈^{だけ}は信じ^{たく}度^{たく}なかった自分のためだろうと何だろうと。

いかりが復^ぶり返^{かへ}して、憎^{にく}くんで、苦しんで、全部、撲^ぶつ壊^{こわ}してやりたかった其^そ様^んなに、宜^いい男^{おとこ}なのか我^{われ}をわすれる程、神様の^{かみさま}こと、忘^{わす}れる程、お前のすべてじゃなかったのか！

分^{わか}らなかつた、なにも彼^かもわからなくなつた、

炬^{あかり}のこと、しんじていた女^{おんな}のこと、俺^{おれ}は、

ほんとに、しんじていたのだろうか。信^{しん}じるなんて語^{ことば}そんな簡単^{かんぱん}に使^{つか}つて宜^いいのか、つかつちやいけないのか、俺^{おれ}がなにもかも甘^{あま}かつたのか。俺^{おれ}が駄^だ目^めだったのか、否定^{ひてい}して呉^くれる人、いながつた、俺^{おれ}がただ誤^ご茶^{ちや}々^{ちや}々^{ちや}考^{かんが}えてるだけだったから。

復^ぶり返^{かへ}した分、憎^{にく}しみは付^まき纏^{まと}つた、仕事にも弊^{へい}害^{がい}がでて、こまかなミスをいくつもした、集中出来^{しゅしゆで}なかつた。事務所の所長^{しよちやう}にも怒^おこられた、「たるんでるんじゃないか」そうかもしれない、思^{おも}つた、弛^た然^るんでる、だから、

なにもみえなかった、嘘もほんとも分らなかつた、疑がいもしなかった、だから、此んな、欺された気分になって、……俺れが怒られたのを氣遣ってか宇川さんが飲に誘ってくれた。

「どうしたの、炬ちゃんのことでなにか有ったの」

心配そうな顔で宇川さんが訊く、

「いや、関係ないですよ、何か、ここん所、ぼうっとしちやって」

「まだ、ひきずつてるんじゃないの、ちゃんと逢って話しはしたの」

「いえ、してないです、……」俺れは酒をのんだ。「会う気もないですし」

「夫れって、意地になってる丈なんじゃない、ただ自分から逢おうっていうのが憫然な位と思つて、夫で逢わずにいる丈なんじゃないの」宇川さんは迫及して来た。

俺れは鬱遠しいな、思つた、「左うですね、意地になつてるのかもしれない」だから笑つ

た「会うか会わないか、もういちどちゃんと考えてみます」すこし丈笑った。

宇川さんはため息を吐いた、「なら、いいんだけど、……」それからつづける、「ごめん、お節介いったね」

宇川さんの烟草の烟が騰つてすぐみえなくなつた、居酒屋の照明はなにも彼も見えなくさせる、俺は月明りをしらない、照明の中で育だつた、太陽と照明とねむる前のひと時の闇、夜、あるいてても、町の照明は完全な暗夜を免さない、たばこの先端、何百度の熱、四周を照らすには心基ない、冬には手を温ためる、それさえ足りなくて、消すと携帯灰皿に仕舞い込む。

意地になつてると言うのは当たっている様に思えた、自分から逢おうというのが憫然なと言うのも、或は俺れの本音だろう。では、俺れは、夫を克服すべきだろうか、左うして逢つてなにを言う可きだろうか、縁りを戻してくれ？ 最早、なにも、しんじること

の出来ない女と、彼奴が、ごみをひろって
いたら、なんて思うだろう、偽善者と、いつか俺
れがいわれた様に俺れもあいつにいうだろう
か、或は、やっぱり、神様のことに信じてい
たんだと思つて感激するだろうか、極端なん
だよ！ 彼奴は、神さまのこと、多分だけど
しんじていてもそのまえに一人の女だった
つていうそれ丈のことだ、夫れ丈のことだけ
ど、でも、熱をだしても自分がくるしくても
あいつが守ったことを、あいつが簡単にやぶ
ったことが、許せない、信じられない、……
帰り道たばこを吸つてあるいていた、まわ
りにはだれもない、冬は寒くて手袋をしな
がら喫つた。歩きたばこはだめだと言われる
なぜ誰もいなくても駄目なのか？ 副流烟
をすえるものなら吸つてみる、前から自転車
が遣つて来る、烟草をすわずにひつ込めた、
ポケットで携帯電話がふるえる、黒池だった。

「おう、今平気？」

「ああ」思ひだして苦い思いをする「平気

だよ」

「今度さあ、またのもうぜ、珍らしい奴から誘いが来ててさあ、お前もこいよ」

「珍しい奴」考える、中崎か、本庄だろうか、「だれ、中崎？」

「ふふふ、そいつは来てのお楽しみだな。日々^{ひにち}なんだけどさあ、○日だったらお前休みつしよ？ どうよ」

「あーごめん、氣イ乗らないからやめとくわ」

「なんだよーそんなこと言うなよー其奴^{そいつ}がぜひについてことでお前御指名なんだよーな、な、たのむよ」

何度も断ったが黒池は執拗^{しつこ}かった。ここまです執拗^{しつこ}いのは珍らしいなと思ったのと、久しぶりの友達と逢^あえば多少は気分も変わるかもしれないと思ったのとで了承した。電話を切ったら又^{また}あのいやな気分を思い出し、失敗だったかなと後悔した。

「初めましてえ、美佳子です」

いわれるので挨拶する、「こっちだこっち」と黒池が嬉々として誘導する。黒池の新らしい彼女は頭の軽そうな子だった、だいたいこいつの彼女はいつもそうだが。駅で待ちあわせをした俺れたちは移動を始めた。黒池は鼻の下を伸ばして彼女とおしゃべりする。俺れはひとりだ。くるんじやなかったと思う。

店は小じやれた内装で、暗い照明の、雰囲気の良い店だった。全席個室が美点とかで四人用のテーブルに案内される。彼女の携帯電話が鳴った、電話に出る為彼女が席を外す。

「で、お前の新しい彼女が、お前の言う珍しい奴か？」

「まあ左うこわい顔するなって、其んな訳ないじゃん、ちゃんともう一人女の子招んでるから」

「女の子？」顔が強張る、「誰がそんなこと頼んだ？」

「いやいやいやいや、ほんと怖い顔するな

って、いや、こう言うのはねえ、むりやりに
でも女の子と逢^あつて楽しく騒いだ方が傷も癒
えるんだって」

「だれが傷なんか……」いつてる途中で彼
女がもどつて来た。俺^おれは口を緘^{つぐ}む。「もう
すぐつくそうです」彼女が俺^おれに笑いかける。
已^{やむ}を得ずニコツとした。黒池はデレデレした。
すきなんだろうな、思った。いま、何の疑い
もなく好きなんだろう、……目を外^そらしてメ
ニューを目^め繰^くつたり裏返したりした。

話^はなした所、黒池も彼女も是^{これ}からくる子も
大学のサークル仲間だということとはわかつ
た。「お前は就活宜^いいのか」黒池にいうと「夫^{それ}
は言うなよー」と耳を塞いでつつ伏^ふした。「面
白^{うま}い」と彼女がいうので苛^{いら}つとした。世渡^{よわた}
の旨^{うま}そうな子だと思った。其^そ様^んなのが、魅力
になるだろうか、……吃^{きつ}度^と世渡^{よわた}がへたな子を
みても俺^おれは魅力と思わないだろう。

彼女と是^{これ}から来る子は学年が一つ下なので
就活はまだなのと言う。「私も来年から就

活かーと思うと」彼女が言った所で人が這入
つて来た。店員かと思つたら違つた。

「深山さん？」

俺れが驚ろくと相手も驚いた。炬のとも
だちの深山さんだった。俺れと深山さん以上
に黒池と其彼女が驚ろいていた。

「まさか知合いだつたとはなー」

黒池が惜しいことをしたと言う調子でい
う。「ねー」と彼女がすぐに同意する。知り
あいとは言え、二度程しか逢つたことがない
ので親しいとは言えないが、知っていること
は慥かだった。俺れは苦々しい気もちでほん
とうに来なけりや宜かつたと思つた。

「えっ、ていうか、炬は、……」

開口一番深山さんはいった。「別れたんだ」
俺れは二番目の台詞がこれだった。「あつ、
そうなの……」深山さんは言つて外套を脱い
だ。酒をたのんで席に座る。

気不味かつたので極力話をした。黒池から

きいて知っていたのにサークルでは何んなことやつてゐるのなどと愚な質問をした。其上黒池が積極的に答えた。こいつは日頃からお喋舌りなのに酒が這入ると益しゃべる。彼女も話し好きのようだったが深山さんが余り喋舌らないので気になった。

二時間程がすぎ頃合になった。ここまでつきあえばもう義理はないだろう、抑も義理杯ないが。「あした仕事があるから」と言えば大抵そこまでは引き留められない。俺れは時計を見た。「そろそろ……」いおうとすると深山さんがグラスを権と措いた。

「なんで炬と別れたの」

目が据っていた。酔いがまわっているのはたしかな様だったが、此んな酔い方をする人だっただろうか、「そーだそーだ、何んでだ」調子にのった黒池が乗ずる。

「いや、なんでって、言われても、……」俺れが訊きたい、訳でもないが、なぜこんなところで公表しなければいけないだろう、と考

えてはつとした。深山さんは俺れがふつたとしても考えているのではないだろうか、「別れて欲しいっていわれたんで……」早く帰りたいと思った。

「それではいい言つて別れて来た訳？」
深山さんはなぜか俺れを責める。なぜ皆なすなおに応じたかを気にするのか、「あ、はい、まあ……」深山さんは炬から聞いていなかったのか、と漸く氣付く。

なぜいわなかったんだろう、いや、敢えて、報告する様なことではないか、報告しづらかった？　なぜ、自分が、好きな男をつくつて出ていったから、やめよう、此様な所で腹をたててもしかたがない。こんな話をすれば場が暗くなるばかりだ、事実黒池の彼女は退避している、「あの、ごめん、おれ……」強引に帰ろうとすると深山さんが店員をよんだ。酒を頼んでいる。

「何ういう理由か、教えてよ」一転して切実な顔で言う。深山さんからすれば、炬か

ら、うらぎられたような気もちだろうか、それが大袈裟なら、信頼されていなかったのかと言う様な。俺おれは完全に帰りそびれたなと思ひ、あげかけた尻おとを椅子に落した。

「俺おれがしつてること、すくないよ。ただ、すきな人ができたから、別れてほしいっていわれた丈だけ。その男と俺おれはあつた事ないしみたこともない、何どういう繋がりでどういう経緯で好きになつたのかも知らない、好きな人が出来た、つて言われたけど、もう、夫それをいわれたときには付き合つてたんじやないかって、其そんなこまかいこと今は疑うたがつてる。でもなにも訊きかなかつた。其その時は好きで恋おもつてだから是これからつたえるから、俺おれとわかるんだらうって考えるでもなく漠然と思つてて、でも、夫それは間違いかもしれなくて、つまりなにもわからないんだ、いまもわからない儘まま、此こんな感じだけど、意味わかる？」と俺おれは深山みやまさんに確認を取つた。拙たどたど々しい説明で、まあ、分わからないだらうなと思つた。俺おれ

は説明がへただ、うまくしゃべれない。でも、それを恥じていたら、なにも伝わらないから喋舌しゃべった。

深山みやまさんは考え込んでいる様だった、「じやあ、別れてから一回も逢あってないの？」質問する。

「あつてないし、連絡も取つてない」

「私、間あいだ、取り持つて上げ様か？ そんな状態じゃ、ふたりの為にならないでしょ、彼の子のことだから、絶対、なにか事情が有ったんだよ、只ただいかなかった丈だけで。しんじてあげてよ、信じてあげなきや、あの子可哀かわいそうだよ、……」深山みやまさんは酔った目で俺おれを見あげながら言った。

かわいそう此言葉このに赫怒かつとした。「でもあいっはなにもいわなかった、じつと座つて、言い訳も、自分の事情を一方的にわかってもらうこともしないで、ただ凝じつと座つてた。覚悟が有ったんだ、彼奴あいつにはいつだって覚悟があった、だからいい訳しなかったんだ。ないて

たけど、夫は、なんでか分ないけど、でも全部せおう覚悟で来たんだって、後から考えれば思つて、だから俺れはあいつの事恨んでるけど、夫は、あいつの覚悟に適つてるって左ういうわけでもないけど、……」言つて失敗つたと思つた。黒池と、彼女が、完全にだまつて居る。語がすぎたと後悔した。しかし深山さんは激して仕舞つた。

「うらんだ儘なんて宜くないじゃん！ 会えば、せめて、自分の何所がだめだったのか、自分のどこが気に入らなかつたのか、わかるし、きつとちゃんと聞けば事情だつて教えて呉れるし、それが二人の為でしょ？ 是からの為になるでしょ？」勢よく捲し立てる。

俺れは落着く為に酒を飲んだ、其タイミンで店員が深山さんの酒をもつて来た。誰もなにもいわない、店員が行くのをまつて出来るかぎり平静に言つた。

「俺れは、駄目なところ、ばっかだよ。今でも、能く、彼所がだめだったんだとか、気が

きかなかったとか、思い返して後悔する。でも夫は他それひとに教えてもらう事じゃないんだ。炬あかりが気にいらなかったとこ、たとえば俺おれが新しくだれかとつきあったとして、その人が同じようにそこを気に入らないと思うかなんて、分わからないじゃないか、俺おれは自分の駄目なとこ、自分で気づいて、それを絶対に忘れちゃいけないんだと思う、自分で自分を批判しつづけなきゃいけないんだと思う、でももし俺おれが夫それを人にあずけたら、もしかしたら其そのつぎのだれかが宜いいと思って呉くれる所を、俺おれは自分で悪いと思ってないのに潰こしてしまうかも知れないじゃないか。それが、是これからのためだとは、俺おれは思えない、少すくくとも俺おれは後悔する」言みって、深山みやまさんが承服しかねる顔をしていたので、矢張やつぱり伝わらないかな、と思った。伝えられる事なんて、ほんの一部で、誤解されても、我満がまんするしかない。なにもかもを伝えようと欲張よくちやうってしまえばそのぶん相手にはとどかなくなっていくん

だ、深山^{みやま}さんが席をたつて外套^{コート}とかばんを把^とった。「分^{わか}んない、私には全然分^{わか}んない」ひと言^{こと}々つてとび出していく。俺^おれはため息を吐^ついて本当に、こなければ宜^よかったと心の底から思った。然^{しか}し俺^おれ以上に後悔している男が隣にいた。

「おれは、おれは、お前の為^ためになればと思^{おも}つて、……」黒池^{うか}が目に涙を浮^{うか}べて言^いった。

「何^どうして己^おれはいつもこうなんだ、遣^やる事遣^やる事全部裏目に出^いて……」机をたたいて泣きくずれる。此奴^{こいつ}はいい奴で、軽薄^{けいぱく}だけど、だから簡単に人の為^ために行動出来^でる事を、ときどき思^{おも}う。「ごめんな、深山^{みやま}さんの御勘定^お、俺^おれが払^はうから」「そういうことじゃないんだよおでもありがとう」彼女は案外に平静で店員にあたらしい御着^おみ^つまをたのんでいた。

それから帰^かえる時間まで俺^おれと彼女で黒池を慰^{なぐさ}めた。黒池はさらにのんだので大部^{だいぶ}酔^よっていた。俺^おれが送^おつて行くよと言^いうと「だいいじよですよ」とこともなげに彼女がいう。

「慣れてますから」いって笑った。別れ際にも彼女は「元気だしてください」と声を掛けて呉れた。迷惑をかけたのに、人を気づかう余裕の有るいい子だ。俺の見る目なんてたいたもんじゃないな、思った。

それから暫らくは、誰とも飲まず、遊ばずすごした。深山さんと口論したお蔭か、気分は其所まで波立つこともなかった。黒池は最早わすれている頃だろう。休みの日にはパチンコに行つて、夜にはテレビをみて過ごした。

映画をみることも有った。レンタルビデオ屋にいくと、炬と視た映画が並らんであつて、風波が起る。やっぱり詰らなかつたな、炬が涙を流がしてみた映画に、遠慮なく思えることがちよつとした発見で、同時に憂さを晴らした。

黒池達と飲んでから二週間もしたころ、電話帳に登録していない居住地从、メールが

とどいた。

深山^{みやま}です。

黒池くんから勝手にアドレスを聞いてしまいました。突然メールしてごめんなさい。

話があるので、今度会いませんか？よかったら、休みの日教えてください。

絵文字がつかわれて居^いないことが、俺^おはすこし怖いなと思った。平生^{ふだん}からこういう人なのか、それとも感情の曲折があつて絵文字を使い度^たくなかったのか。俺^おは絵文字をつかつて思^{おも}いつ切り可^か愛^わいメールを返^かえそうかとも思^{おも}つたが、思^{おも}案^あのすえ廃^やめた。

押沼^{おしぬま}です。

いいですよー、一番近い日だと、×日がおれは休みです。でも仕事帰りとかでよければいつでもいいといえбайいですけど、どうでしょうか？

なぜ敬語なのだろうと思ったが、相手も敬語だったので、いいかと思ひ送信した。それから何通かメールして、逢うことに決まった。

話して何だろう、……考えたが、わからなかった。炬あかりに関することなのはまちがいないだろう。炬あかりにも、恐らく、会ったのだろう、炬あかりは何を言っただろう、何んな気持ちだっただろう、考えて、深山みやまさんがとりもってくると言うのを断然と拒否しておきながら、期待している、俺おれは低俗だな、いやだな、思った、……

自分から会おうと言うのが憫然みづともないだけ、宇川さんにいわれたことを思い出した。左右そうなのかな、左ひだりなくだらない理由だったのかな、……しりたいと思う気持きもちが膨ふくらんで、強く否定することができなかった。

深山みやまさんと逢う日まで、何日か、また擒とられることになった。でも仕事に支障をだす

程ではなかった、夫れどころか賞められることもあった、でも俺れは喜ぶことにも集中出来なかった、話^{はな}して何だろう、炬^{あかり}は、何を、言っただろう、正直にいえばこんなことも思っただ。

俺^おれのメールアドレスを教えたのは黒池ではなく、実は、炬^{あかり}で、期日にまちあわせ場所^{あかり}にいくと、炬^{あかり}が待っていると言うような妄想。しかしそれから先は芳^{かん}ばしくないもので、なにか、いって遣^やろうと思ったり、炬^{あかり}がなにか言い訳をして、俺^おれが難^{なん}詰^{ぎつ}して炬^{あかり}をなかせたり、又、失^ふ恋^られたあの日のことを思い出して、いかりに血をたぎらせ、やっぱり殴^やって遣^やりたい、せめて、頬^ほをはるぐらいはしてやりたい、いつまでも瞋^{いか}りにとらわれて、その一方で、炬^{あかり}と、もう一度、くらしで行くようなことを考え際限^{かigen}がなかった。俺^おれは女^め々^めしく、恋^く々^くして、見^みつともなかった。自分^{その}でも其^{その}ことが分^{わか}っていた、然^{しか}し時間^あが空けばそんな空想をした。

当日になった。結局仕事のあとであうことになり、俺おれは一度家にもどり着替えてからむかった。向むかう途中どきどきした。此こんなに緊張するのはいつぶりだろうと考え、炬あかりと別れるより更にまえ、付き合ってしばらくしてからぐらいかもしれないと思い至り、そう言えばいつ頃この緊張感をなくしてしまっただろう、夫それが、つきあうって言うこと、いろんなことを、善よくもわるくも習慣にしていることが、同じ時間をすごすと言うことかもしれないと思った。

もちろん空想のなかには俺おれが深山みやまさんから無茶苦茶にせめられる、という筋道パターンもあった。俺おれは想像の中で反駁はんぱくもしたし遣り込められもした。なにごともなく穩便おわに終れば宜いいな、考え、でも炬あかりがいることを考えた。

約束の場所につくと深山みやまさんはまだの様だった。人のいないところで烟草たばこを喫すう。炬あかりはルーズだったなと思った。深山みやまさんはどうだろう、……約束の三分程前に深山みやまさんはき

た。

「今晚は」

俺^おれは「早^おかったね」と言い烟草^{たばこ}を携帯灰皿にしま^おう。「早^おい^ぬつて、押^お沼^{しぬ}くんのほうが早い^おじゃん」い^おつてから、「あ、ごめん、このま^おえの御金^{おかね}払^おうよ」と鞆^{かばん}から財布をだした。

「い^おい^つて、おれ社会人^そだし」断^そつたが「其^そんなわけ^おい^かない、黒池^{くろいけ}から値段^{ねだん}も聞^きいて来た^きからさ」とお札^{さつ}をさし出^でした。こ^こで問^{もん}答^たしても損^{そん}だなと思^{おも}いうけ取^とつた。一見^{いちけん}したところ、機嫌^{きげん}はわるくな^なさそう^{さう}だ^だつたので、ひとま^{ひと}ず安^{やす}心^{しん}した。

「ご飯^いでもたべ^べながらはな^なそう^{そう}か」深^み山^{やま}さんがい^いうので頷^{うな}く。「あ^あつちに、宜^いいお店^{みせ}有^ある^あんだ」ゆ^ゆびをさ^さして歩^あき始^{はじ}める。俺^おれがすこ^{すこ}うしろを歩^あいて、黙^{もく}つた儘^{まま}移^{うつ}動^{どう}した。なにか話^わそう^{そう}かと思^{おも}つたが緊^{きん}張^{かう}の為^{ため}か思^{おも}い浮^うかば^ばな^なかつた。深^み山^{やま}さんが少^{せう}し後^ごろを振^ふりむく。「仕^し事^じのあ^あとで誘^さつちや^やつてごめ^めん^んね」「あ

あ、いやいいよ、なれてるから」まただまっ
てあるいた。

人通りはそこそこ多かった。平日の夜だし、
こんなものだろう。大体がみんなだまってあ
るいていた。はなしてはいても、聞きえない丈だけ
かも知れない。皆みなな、深刻な話はなしや、笑わらえ
る様な話を、持っている。出す機会が有る人
もいれば、ない人もいるだろう、無理矢理に
話して四辺まわりから疎うとまれる人もいれば、本人
は話したくないのに根掘葉掘ねほりはほりきか
れている人もいるかもしれない。俺おれにはなにも知ること
とができない、此身こののまわりの、ほんの糸わか
な人達のことさえ、俺おれは満足にすること
ができない。

深山みやまさんがとまった。店に着いたのかと思
つて見ると、ただビルが有る丈ただけで飲食店はない。
深山みやまさんを窺うかがうと深山みやまさんは一点をみて
いた。俺おれも目を移すと人影がある、炬あかりだ、

「炬……」

立姿たちすがた、服装、見なれた人物が、こちらを

みていた。マフラーで顔がかくれているけど、わかる、何度も見た、すこし前迄、見れなくなるなんて想像もしなかった、俺れの恋人。

「此所で宜い」

なにか言う深山さんに告げた。「だまってごめん」だとか「冷静に話なそう」だとかいうので、うるさいなと思った。頭は冴えていた、しかし心臓が止らなかった、身体中が血に震える様な感覚がおきた。

炬は変わって居なかった、あたりまえだが、そのあたり前に納得出来なかった。俺れの、なにも彼もが変わってしまったのに、お前は其ままなのか。俺れの外貌だってなにも変わっていなかったのに、理屈が分つても、わからなかった。

瞋りが又燃えるのを感じた。然し、夫は、胸の悪くなる様な不純ないかりで、俺れが、怒っていることを、知らしめたいが為めにもえているのかもしれない。炬はたつて

いた、立って此方こちらをみていた、深山みやまさんが移動するので俺おれも動いた。距離が詰まっても炬あかりは只俺ただおれのことを見た。

「久し振り」

俺おれが言うので炬あかりも答えた。深山みやまさんは「やっぱり、ちゃんと話した方が宜いいと思つて」と紛こまかい雑言じやくつた。目に血が滾たぎつて沸騰しているようにも感じたが、まわりからどうみえたのかは分わからない。俺おれはいうべきこともなかったので站たち尽つくした。本当は、すごい速度で言いたいことが旋まわつているのかもしれない。でも俺おれにはそのいいたいことがえらべなかった。

「一回、お店に入つて、冷静に話はなししよ」
深山みやまさんがあいだにはいった。

「ここで宜いいよ、だいたい、話すことなんて有る？」俺おれはだれに訊いたのかもわからなかった、だから誰もこたえなかった。

「そうかも知れないけど、でも、話しあい、本当に足りてる、お互たがいのことちゃんと理解

できてる？ 理解するまで、話なし合ったほうが、きつと」

炬あかりはなにもしやべらなかつた、ただ泣きそうな顔をして俺おれを見ていた。なけば夫それで済むのか、俺おれは嚇ど鳴りたかったが嚇どなれず目をそらした。俺おれがいつか贈った時計は、もう、あそこには懸からないのだろう、隠れてみえない手首を見て思った。

まだなにか言う深山みやまさんをさえぎつた、「：お前は、何か俺おれに、いうことあんのか」炬あかりをみて言った。炬あかりと呼びかけることはためらわれた、それがなぜだかわからなかった。

「ごめんね」

炬あかりは一度目をふせて、上げると、言った。なきそうな顔で笑ったが今度は泣かなかった。俺おれは激した。

「ごめんね？ ごめんねって、詫あやまる位ぐらいなら、するんじゃないよ、夫それは何なんだ、自分が悪いことしたと思って、夫それで詫あやまってんのか、好きだったんじゃないじゃねえか、好きにな

ったんならしようがねえじゃねえか、詫まんなよ、詫まられたら、俺れは、……」自分が嫌になったのと、炬の目から涙が溢れたので、だまった。あたりは寂とした。道ゆく人で、こちらを見る人がいる。俺れは羞恥心を感じ、俺れは、なんて、小さい人間なんだろうと思った。感情に躓がうことさえできない。感情を、打衝けることさえできない。好きな人に、好きだった人に。

暫らくだまってたので行こうとした。深山さんは炬の肩を抱いて保護者の様だった。俺れが悪者か、左右かもしれない、思って、踵を翻がえした。言うべきことはないか、考えたが、思い当らなかった。

居酒屋の騒がしいのは、きらいじゃない。程度の問題も有るが。学生は騒がしいからきらいだ、なんの責任もないからって、夫れは人によるか、社会人でも皐蠅いのは皐蠅い。俺れは宇川さんとのんでいた、俺れが誘った。

「じゃあ、理解はし合えなかった訳ね」宇川さんは笑いながらいう。

「まあ、そうですね、でも理解なんかしあえると思います？ 分らないことだらけですよ、知ろうとすればするほど、分なくなつて、俺れには、むりですよ、ええ」

「まあ認め合えればいいと言う意見も有るけどね」

「そりや理論としてはそうでしょうよ、でも、まあ、……俺れが無理な丈か」

俺れはいつになく饒舌^{しやべ}つて、気分が不安定なのを、かくした。逢^あわなければよかったと、思った。当^{あた}り前だが深山^{みやま}さんからは何の連絡もない。折角^{つか}氣を遣^{つか}ってくれたのにごめんと言おうとしたが、よけいなことをという意識が強くて言えなかった。

宇川さんはだまってたばこをすった。喧騒がつよまった様な氣がした。俺れは喋舌^{しゃべ}れば浮付^{うわっ}いた言葉しか出て来ない氣がして、口を緘^{つぶ}んだ。

頼んだ酒がきた。店員とは顔馴染みになっていて、宇川さんが声を懸ける、「きょうも繁昌^{はんじょう}してるね」「はい、面倒^{めんど}くさいっす」アルバイトが言うので笑った。「好い事だよ、忙しいのは」「いやー、此^こんなに忙しいって知ってたら這入^{はい}んなかったっすよ」はなしていると奥から呼ばれるので馳^かけて行っただ。正直過ぎるだろ、と笑っていると、宇川さんが俺^おれのことを見た。

「ねえ、ほんとに」みた儘^{まま}つつける。「ごめんねなんて言うなって、思った？」

俺^おれは視線^そを外^そらして、考えた、「最初は、心から、思いました。でも、あとから思い返すと、あの日のことでおぼえてるのが殆^ほんどあいつの言ったごめんねって語^{ことば}だけで、その事考えてたら、あいつのいった事思い出したんです。誼^{けん}譚^かして、仲なおりした後、炬^{あかり}は、わるくなかったんだから、詫^{あや}まらなくても宜^よかったのについていいたら、仮令^{たとえ}、自分が悪くなくても、相手の気もちをわるくさせ

やったら、詫^{あや}まらなくちゃって。だから、あの時、詫^{あや}まったのかなとか考えて、ほんとうの所は何^どうなのかわかんないですけど、今でも、其^{その}、ごめんねって言ったことにたいしては、別にうらめしく思っ^てないです」考えながら答えた。

「彼氏をつくった事にたいしては？」宇川さんが少し笑いながらきく。

「いや、もう、分^{わか}らないです。ごちやごちやして、憎^{にく}くむ気もちとか、好きだった気もちとか、あつて、でも、一つの気もちじゃないです。おれ女々しいですかね」

「根深い性格ってことはたしかな様だね」宇川さんがいうので根深いかーと復唱して考えた。その様子を見ると「まああたしも根深いけどね」と言っ^て笑った。

あの日、帰^かえってから、何度もあれを言うべきだったこれをいうべきだった、考えた。神様のこと、ほんとにしんじてたのかとか、もつと、優しい言葉をかければよかったのか

とか、考えて、いえばよかった、後悔してから、でも、思い付かなかったから、しかたないと思った。全部の事を伝えられるわけじゃない。俺おれは彼奴あいつと逢あって、でも言葉は選えらべなくて、したら、それが凡すべてなんだと思う。胸のなかはずっと明澄すつきりしない。夫それはただ、俺おれが陰険な性格だからかもしれない。

言い訳を重ねるのは廃よそう。俺おれはいい人間になりたかった、為なれなかった、是これからも、為なれないかは分わからない。俺おれはあいつのこと凄すごいと思った、でも、いまは、わからない。

お会計を済すませて外部そとにでた。帰る間際、
「私、結婚するんだ」宇川さんがいう。俺おれは驚おどいた。驚おどろいてへんな声を出した。「なにその声」宇川さんが腹をかかえて笑う。彼氏そが居いるのは知っていたが、まさか結婚するとは。「だからね、会社、退やめると思う」言うのでそうかと思った。

俺おれは宇川さんのことも、ちゃんとしなかったのかも知れない。でもそれ位で丁度ちやうど宜よ

かったのかもしれない。何が正しいのかわかんない、正しくないのかわからない。分らない儘変わっていく、俺れ丈じゃなくて、皆な、それぞれになにかがある。俺れは実は実感できないと思った、わからないと、変えることもあって、変らないこともある、今は夫でいいと思った。

遅れて「お目出とうございます」と言った。

宇川さんは「有難う」と言い、「あーいまの声録音しときやよかった」と涙を拭いた。「やめて下さいよ恥しい」俺れはいって、「とは言ってもまだ暫くはいるから、またのみに来ようね」という宇川さんとわかれた。

帰り道があるいて帰った。明澄した訳ではないけど、何だか、すこしなにかが分った気がする。気のせいかもしれない、気のせいじゃないかもしれない、前を歩くサラリーマンが喫っていたタバコをすてた。火を消してひろうと、大きめの携帯灰皿に抛げ入れた。